

## O8-042

NICUに入院する新生児と家族の  
つながりを支える身体性オンライ  
ン面会システムの検討鳥谷由貴子<sup>1)</sup>、松本 敦<sup>1)</sup>、外館玄一郎<sup>1)</sup>、  
村田 藍子<sup>2)</sup>、駒崎 掲<sup>2)</sup>、渡邊 淳司<sup>2)</sup>、  
赤坂真奈美<sup>1)</sup><sup>1)</sup>岩手医科大学 医学部 小児科、<sup>2)</sup>日本電信電話株式会社  
コミュニケーション科学基礎研究所

【はじめに】COVID-19流行を契機に、当院NICUでは2021年6月からオンライン面会を導入した。様々な制約はあるが、遠方に在住の家族や、同胞面会を希望する家族を中心におおむね好評であり、COVID-19による面会制限終了後も継続的に行われている。一方で、子どもの視覚情報のみでは、子どもとの物理的距離を強く実感する親もいることが指摘されている。当院では現在、日本電信電話株式会社（NTT）と共同で、児と双方向性のコミュニケーションが可能となるオンライン面会システムの開発に取り組んでおり、現状と今後の課題について検討した。【方法】2024年4月1日から2025年3月31日に当院NICUに入院した早産児のうち、同意を得られた家族を対象とした。NTTが開発した独自の触覚を伝える身体性オンライン面会システムを使用した。このシステムでは、家族は胸に抱えたデバイスを通じて、入院中の児の映像とリアルタイムの心拍の振動を体験する。呈示される振動は、新生児の心音をモデルとしており、遠隔地にいながら身体に触れているような振動触覚体験を提供する。また、家族が児にむけて話しかける音声はマイクで拾われ、保育器に設置されたスピーカーから子どもに呈示される。このシステムの使用感についてインタビュー調査を実施した。【結果】6家族11名、児の在胎週数中央値24.9（四分位範囲2.0）週、出生体重705（159.5）gが研究に参加し、全身状態が安定した生後1ヶ月過ぎに体験した。11名中8名の家族が、身体性オンライン面会に好意的であった。その理由として、「抱っこしている感覚が、視覚・触覚双方で感じられた」「心拍を感じて、抱きかかかえているような気持ちになり、寂しさが軽減すると思った」などの回答が得られた。改善点として、デバイスの触感に温かみを求める声があった他、画角を家族が操作できるほうがよいなどの意見が得られた。【考察】身体性オンライン面会では、抱っこしている感覚に近い体験が得られ、児との心理的距離が近くなることが示唆された。今後は、実際に家族の精神的健康や愛着形成の向上につながるかを検証していく方針である。

## O8-043

NICU・GCUで勤務する看護職者が  
長期入院児の発達を支援するプロ  
セス藤田 未優<sup>1)</sup>、津田 朗子<sup>2)</sup>、斎藤 瑠華<sup>2)</sup><sup>1)</sup>金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 博士前期課程、<sup>2)</sup>金沢大学 医薬保健研究域 保健学系

【目的】NICU・GCUの長期入院児一人一人に応じた発達支援（Developmental Care；以下DC）実践のために看護職者が何を大切に児に関わっているのか、どのような意図でDCを実践しているのかに関する知見を得るために、NICU・GCUで勤務する看護職者が長期入院児の発達を支援するプロセスを明らかにすること。【方法】NICUまたはGCUで勤務経験があり、長期入院児へのDCに直接関わった経験がある看護職者11名に半構成的面接を実施した。インタビューでは、これまでNICUまたはGCUの長期入院児へのDCに関わった中で印象に残っている場面を想定してもらい、その児の状況と行ったDCについて、児の経過に沿って自由に語ってもらった。得られたデータをM-GTAにて分析し、分析テーマを「長期入院児の発達を支援するプロセス」、分析焦点者を「長期入院児に対してDCを実践する看護職者」と設定した。【結果】NICU・GCUで勤務する看護職者が長期入院児の発達を支援するプロセスは【全身状態を整えつつ最低限の支援を続ける】ことから始まり、『児の状態に余裕が出てきたサインを感じ取る』ことによって【児の可能性を広げる】支援へと移行していた。また、児の状態に合わせて【蚊帳の外の家族を引き入れる】支援や、【面会者から児と共に歩む家族への変化を支える】支援などの家族へのアプローチも同時に行っていた。児の急性期から看護職者が協働し【児の反応からその子らしさを見出す】ことが赤ちゃん観の形成に影響していた。また、これらのプロセスは『看護職者の赤ちゃん観』が波及することによって実践されており、長期入院児へのDC実践は『看護職者の赤ちゃん観』をより豊かに発展させていた。【結論】看護職者は児の急性期から長期入院に至る経過で児の状態に合わせてDCを実践しており、家族の持っている力を引き出すことで、家族を児のケアの中心に引き込んでいた。また、豊かな赤ちゃん観を基に、スタッフ間で話し合いながら児のサインや変化を感じ取ることで、児一人一人に合わせたDC実践につながると考える。